INTERVIEW

市立大村市民病院 管理者
立花一幸先生

【プロフィール】 立花一幸先生　1982年自治医科大学卒業. 1986年国立長崎中央病院外科レジデント, 1987年同院救命救急センター主幹補佐, 1993年長崎県離島医療圏組合上対馬病院長, 2000年国立嬉野病院外科医長／救急総合診療センター長, 2003年医療法人天神会新古賀病院消化器外科部長／救急総合診療センター長. 2008年, 市立大村市民病院管理者に就任, 現在に至る.

大切なのは, 求められる医療に応えること

聞き手：山田隆司　地域医療研究所所長

離島医療の難しさ

山田隆司(聞き手)　今日は，市立大村市民病院に管理者の立花一幸先生を訪問しました．私が訪れたのは開院式以来ですが，開院から７年目を迎え，その間に長崎県離島医師搬送システム：NIMAS(Nagasaki Islands Medical Air System)という離島に先生方を搬送する事業もスタートしました．現在，病院の建て替えの構想も進んでいますので，大村市民病院の今後についてもぜひ伺いたいと思います．

まずは, 先生の経歴を紹介していただけますか.

立花一幸　私は生まれが長崎県の離島，対馬なのですね．中学校まで対馬で生活をし，高校からは

下宿をして長崎市内の高校に通いました．

山田　そうだったんですね．対馬は自治体としては一つなのですか．

立花　もともとは６町ありましたが，平成の大合併で今では対馬市となりました．対馬自体は，私がいたころは人口も５万人近くで，各町にいくつも小中学校があり，高校も島内に３つありました．

山田　進学するために対馬を出ていく人も多いんでしょうね．

立花　そうですね．対馬は長崎県ですが，地理的には福岡に近く，フェリーも飛行機も福岡の便が多いので，島の人たちは福岡県に出ることが多かったと思います．行政圏は長崎県なのですが，経済圏とか文化圏は福岡に近いような感じですね．

山田　高校で島を出ると必然的に下宿生活になるわけですね．

立花　そうですね．下宿は高校の周りに多くありましたので，珍しくはなかったですね．

山田　先生は，高校にいるうちに，自治医大を目指そうと思ったのですか．

立花　一浪しまして，福岡で浪人生活をして，次の年，昭和50年に自治医大に入学しました．

山田　自治医大を卒業してまた長崎に戻られたという格好ですね．

立花　そうです．昭和57年（1982年）に卒業後，今の国立病院機構長崎医療センター，当時の国立長崎中央病院で２年間研修をして，そのあと離島へ行きました．

山田　最初に行った離島はどこですか．

立花　北松浦郡の生月という島で，60床の病院でした．長崎県の場合は自治医大卒業生が１人診療所に赴任することはなく，全員が大～中離島の中核病院に勤務しました．長崎県では，まず中核病院を充実させるということが優先事項だったわけです．

山田　その病院は，医師は何名でしたか．

立花　60床で４人体制でした．私が行った時には長崎県医学修学資金の奨学生の先輩が３人いました．長崎県では，離島の医師確保対策の一環として昭和45年から長崎県医学修学資金貸与制度が創設されていました．大学は違っても志は同じ先輩たちでしたので，非常にかわいがってもらいました．

そこに２年間いて，それから長崎中央病院の外科で２年間，再研修を受けました．その間に九州がんセンターや亀田総合病院などに内視鏡の研修に出たりしました．

その後，出身地の対馬の上対馬病院に赴任しました．対馬は韓国との国境の島で，上対馬は対馬の中でもいちばん北に位置しており，夜になると釜山の灯が見えるようなところです．95床で医師は内科３人，外科２人，整形外科と小児科各１人の７人体制でしたが，後に産婦人科１人が増え８人体制となりました．当直は当然全科当直ですし，日常診療も自分の診療科ばかり診るほどの規模ではなかったので，内科も子どもも診るという感じでした．当時の病院長が外科でしたので，いろいろ指導していただきました．

山田　そこには何年いたのですか．

立花　義務年限が終わってからも残り，12年いました．最後には病院長も務めさせていただきました．

山田　離島の医療というのは，山間へき地の医療と比べるとさらに難しい面がありますよね．

立花　対馬に12年いた間に感じていたのは，救急と重症患者さんの問題です．離島の宿命というのは，やはり悪天候の時にヘリコプターが飛ばない．同じへき地でも陸続きだったら……という思いを何度もしたことがあって，それが非常なストレスでした．

山田　地理的な条件のために搬送できない．搬送できないことによって，適切な医療が必要な時に受けられない．患者さんや家族にとってそれを